

笹川保健財団 地域啓発活動助成

(西暦) 2020年 2月 8日

公益財団法人 笹川保健財団  
会長 喜多悦子 殿

2019年度地域啓発活動助成

活動報告書

標記について、下記の通り活動報告書を添付し提出いたします。

記

活動課題

地域啓発活動（在宅看護の啓発）／地域在看ネットワーク会議

活動団体名：一般社団法人 在宅看護センター北九州

活動者（助成申請者）名：代表理事 坂下 聰美



# 活動報告書

## 地域啓発活動（在宅看護の啓発）

### 1. 活動の内容・実施経過

(一社) 在宅看護センター北九州の活動フィールドである福岡県北九州市は、政令指定都市のなかでも急速に高齢化が進展している都市です。そして、このような社会変化には、必ず、新たな社会ニーズが生じてまいります。

現在の社会制度やサービスでは対応できないことも多くなり、私たちが多角的な意見を出し合い、独創的なアイデアやネットワークを創り続けることも求められています。

相互の意思疎通や多様な選択肢からの意思決定など、難しい問題もありますが、解決の打開策を見つけるため、このような取り組みを継続的に行いたいと思います。

当センター（令和元年度）の地域啓発活動では、「地域づくり」の視点から、高齢化社会の要となる「在宅医療」「在宅看護」「地域連携」などについて考えてみることとしました。

ミーティング会議名を「地域在看ネットワーク会議（ミーティング）」とし、令和元年11月17日（日）と令和2年1月19日（日）の2回にわたり、いずれもボートレース若松（若松競艇場）にある交流施設「クレカ若松」の市民ホールで開催しました。

第1回のミーティングでは、地域の皆さんにも「在宅」のチーム医療や専門家の多職種連携を分かり易く伝える啓発映画「ピア」をご鑑賞していただき、ご鑑賞後は、グループミーティングなどを行いながら、支え合いのネットワークについて議論しました。

笑顔と撓りのあるネットワークが形成されていくよう、基調講演とコーディネーターは難病のP L S（原発性側索硬化症）を患いながらも、精力的に市民活動を行っておられる啓発活動家の 落水 洋介 氏にお願いしました。

### ※映画「ピア」について

（映画「ピア」は、在宅療養を支える専門家たちの多職種連携や終末期を迎える尊厳の大切さなどにスポットを当てた作品です。終末期を在宅で迎える方が少ないなか、地域の皆さんにも、映画を通して「在宅」での終末期の在り方も感じてほしいと思います。）

また、地域社会の多角的な取り組みは、私たちの新たな可能性も秘めています。自分自身が知らないことへの挑戦もあります。第2回目のミーティングでは、心やからだに障がいのある方の「生き方」について考えてみることにしました。

ミーティング会議では、啓発映画「あまのがわ」を上映し、社会参加や地域ニーズを支える仕組みについても議論しました。

#### ※映画「あまのがわ」について

「踏み出す勇気が自分を変える」をテーマに、自分らしい「生き方」の大切さを描いています。神秘的な屋久島の「生命力」や伝統的な和太鼓の響きを感じつつ、その一方で、先端テクノロジーであるAI（人工知能）やドローン、オリヒメなど、人間にできない役割を描写しながら、これらの対比を通じて、ひとの出会いや役割、協働の大切さも伝えています。自分が変われば周りも変わっていきます。様々な障がいやハードルを乗り越えていく勇気、ひとの助け合いが感じられる作品です。

基調講演では、産業医科大学 神経内科 診療教授（産業医科大学病院 認知症センター長）の 魚住 武則 先生をお招きして、難病支援や在宅療養について、臨床・研究の両面からご講演をしていただきました。

在宅療養の「要」は、訪問看護ということです。地域全体の協調的なコミュニケーション、患者さんやご家族の皆さまを孤立させないことが大切ということでした。

当日は「先天性ミオパチーの会」伊藤 亮 氏から、難病を患いながらも、幅広い活動をされていることが紹介され、コミュニケーションツールとしてオリヒメの実演も行われました。

映画「あまのがわ」では、伝統芸能の「和太鼓」と「オリヒメ」のコントラストが印象的です。ミーティング会議では、新春であることから、伝統芸能の「獅子舞」を演舞し、獅子の縁咬みなどを通じて会場が一体化、笑いや笑顔が満ち溢れたものとなりました。

「獅子舞」と「オリヒメ」のコラボレーションがとても好評で、企画（運営）する側として、ミーティング会議に「笑い」「笑顔」を織り込むことの大切さ、このような一体感を学びました。

## 2. 活動の成果

幅広い分野で、「在宅看護の啓発」を推し進めていくために、地域ケア会議やボランティア皆さまと効率的な運営を目指しています。

全体のイメージがつかみやすい「映画」をもとに、基調講演やグループディスカッションをしながら、「地域社会」「地域医療」「在宅看護」などについて、多様な議論を展開してきました。よりコンパクトで強固なネットワークが、これからも期待されています。

行政への働きかけに関しては、北九州市公営競技局地域貢献室（ボートレース若松）と連携を開始しました。

地域社会のなかで、ボートレース若松に全くご縁のなかった方々、一度もボートレース場に足を運ばれたことがない皆さまに、ボートレース若松にお越しいただくことは、新しい試みでもあります。

実際、地域在看ネットワーク会議にご参加された医師や看護師、教職員や介護スタッフ、さらにはボランティア団体の皆さまの殆どがボートレース若松とご縁が無かったようです。

その一方で、第2回目に「獅子舞」を企画したため、G I 開催中のボートレースファンの方も、当日、ご参加される方がおられました。皆さまが気楽にお寄りになられるような地域啓発イベントの必要性を感じました。

私たちは、それぞれの立場や垣根を越えつつ、これからも多様なシナジー効果を最大限に発揮したいと思います。

そして、地域づくりへ発展するような地域住民との協働作業、地域力の向上などをテーマにした「地域在看ネットワーク」が大きく波及することを期待しています。

## 3. 今後の課題

さまざまな方法で、当センターの情報発信力を強化する必要性を感じています。私たちの活動が継続的に行われるためにも、情報が地域社会に、より効果的に波及することが求められます。

また、行政との情報共有やコラボレーションについては、全体の安心感につながります。

このような安心感は、様々な地域連携の基本となるもので、行政の勉強会やカンファレンスを通じて一歩ずつ実効性を高めていくよう努めます。

地域社会を繋ぐ「安心感」、スタッフの活動することの「安心感」は、当センターの確かな原動力にもなります。

組織面においても、「日本財団」「笹川保健財団」「日本財団在宅看護センター」のブランドイメージが優位性をもたらしています。

このようなことからも、今後の地域連携や在看ネットワークの構築に当たっては、日本財団や笹川保健財団が主催するフォーラムや研修会での幅広い学習や将来展望が大きな柱となります。

地域社会に「安心感」をさらに根付かせていく、北九州市では、「在看（ざいかん）」というニックネームが定着してきています。

在看（ざいかん）⇒安心感（あんしんかん）という構図を作り上げ、さらなる活動を一步ずつ展開したいと思います。

#### 4. 活動の成果等の公表予定

今回の地域啓発活動（地域在看ネットワーク会議）については、北九州市のコミュニティFMラジオ（HIBIKI）を通じて、広く、地域の皆さんにお伝えしていくことになります。

ネットワーク会議に参加した当センターのスタッフも定期番組（健康番組）にラジオ出演し、自分の言葉で、「いま、地域で何が求められ、自分は何ができるのか」ということを話していただきます。

たくさんのリスナーの方からも反響があり、それをもとに、自分自身の思いのこもった地域活動（在宅看護）をさらに勧めていきます。

地域啓発を行いながら、スタッフの意識改革や能力開発、人材育成を行い、地域に根差した力強い活動を行うこと、これからも双方向の多角的な取り組みを効果的に続けてまいります。

また、在宅看護センター北九州のフォローウーの皆さん、ソーシャルメディアを通じて、多方面から活動内容を伝えていただいております。

地域在看ネットワークの有機的な活動が、さらに地域社会から信頼をいただけるよう、新たな取り組みも行っていきたいと思います。

（最後に・・・）

地域の皆さんに、地域施設である「ボートレース若松」の収益金が広く地域社会に役立てられていること（若戸大橋・若戸トンネルの無料化など）も積極的にお伝えしています。

コミュニティFMラジオ (AIR STATION HIBIKI)  
「私たちを 私たちに 私たちから」

